



堀

川ゆうれい船は、こども嘶家が一隻につき二人乗り込む。添乗員として保護者、企画会社員がそれぞれ一名乗船し、残りが客席となる。定員が十二名（こどもは二人でおとな一名）の小型遊覧船だから、満席になったとしても客数は十名に満たない。六畳一間程度の小さな船内で、松江城を囲む堀川をぐるっと一周する間に、こどもの語る小泉八雲の怪談などを聞く、という趣向だ。

「子どもたち、きつとやりたがると思います」

もう半年も前だが、最初に構想を聞いたとき、そう言ってしまったがために引き受けたも同然となり、事実聞いてみたらその通りだったので、ごく早い段階で後に引けなくなってしまう。日程やメンバー、演目の調整に特別なことは何もないので、すいすいと計画は進んで、チラシや幟も順調にできていった。

堀川は、少々いびつな正方形を思い描いてもらうとよい。左上の頂点の位置に松江城があり、ぐいっと北西に辺をひっぱったようにして城の周囲をまわる。黒田町のふれあい乗船場を出発した船は、その引つ張られた頂点から次の頂点に向けて南下していく。京橋川に合流すると直角に曲がって東に進み、米子川でまた方向を換えて北進、普門院が右上の頂点となり、そこで西進して小泉八雲旧居や記念館、武家屋敷などが並ぶ塩見縄手を右に見ながら上辺を進み、ふれあい乗船場へと戻る。

企画会社、堀川遊覧船を運営する公社とともに試乗した際、それぞれの所要時間を計ってみた。出発から左辺を進み次の頂点に至るまでをオリエンテーションの時間、下辺を嘶①、右辺を嘶②、上辺を嘶③とすればおよその構成になる。最初の辺に嘶を持ってこないのは、船が民家のすぐそばを通るために声を立てられない区間、さらに橋を通過するのに遊覧船の屋根を下げねばならない区間があり、しゃべる時間を細切れにせざるを得ないからである。

子どもたちそれぞれの持ちネタをその所要時間から配分するのは、パズルをはめていくようで楽しかった。とりあえずこれでやってみて、あとは微調整すればよかったのが七月の始め。本番の初回が七月三十日である。時間はあるようで、ない。リハーサルの船を出してもらおうと言っても運行スケジュールや人件費を考慮するとそうそう回数は望めない。実際、はじめこちらの希望を伝えたときは難色を示されてしまった。公社にすれば、まだ海のものとも山のものともつかぬ「ゆうれい船」、そして「こども落語」なるものに協力しようにも、どの程度のことができるものやらわからぬことだらけなのだ。（この稿続く）

老い老いに

木幡智恵美

46



〇〇一年の我が家の出来事といえば、四月に娘が進学のため家を離れ、同居家族が一人減ったこと、そして、六月二十三日に新たな住人（犬）となるエリーがやってきたことだ。誕生日、どうしても犬が欲しいと言って聞かなかった二男のために、新聞広告で見つけた犬を雲南までもらいに行った。新聞によるとメスで誕生日が四月十九日（実際は五月十九日だった）で、娘と同じだ。だから、犬の名前は娘の名前にちなんでエリーに決めていた。待ち合わせ場所には、飼い主のおじいさんが大きめの白くていかにも元気そうな子犬と小さくてちよつとひ弱そうな茶色の子犬と二匹連れてきていて、「生まれて今日が三十五日目でまだ乳離れしちやらんぞ」と言われる。息子と私たち夫婦全員一致で小さい茶色の方を選んだ。

「いとしのエリー」は、「忘れられゆく言葉たち」の後に連載した。牛乳を指につけて舐めさせ、添い寝してやるといふ育児から始めたエリーとの日々を綴ったものだ。エリーはそれから家族の一員になり、娘が長男を出産する前まで十三年近くを共に過ごした。

他所の犬と違うところは、メスなのに片脚をあげて小用を足すところ（成犬になってしなくなつた）、臆病で大きな犬が近づいてくると飼い主の後ろに隠れ、猫に睨まれると目を逸らすところ、家が近づくと紐を咥えて小屋まで走るところなど。犬小屋の屋根に猿のようにまたがって座っていた姿は今もありありと目に浮かんでくる。

「お母さんが帰ってくるのがすぐ分かるわ。エリーが吠えるもの」と家族がよく言ったもので、私の乗る車の音を聞き分けていた。車を替えると、新しい車の音までよく聞き分け、散歩に出ると、私の車と同じ車種の車が通るだけで振り返りもした。犬の聴力は人の何倍とも言われる通りで、困ったのは水郷祭の夜だった。花火があがる間中吠え続けるので、見物客とは逆に花火から遠くへ遠くへと歩いたものだ。

癌が見つかったからだんだん弱っていき、家が近づくと飛び上がった紐を咥えるのにそのジャンプ力が無くなり、着地に失敗して顔から落ちるようになった。それでも、最期の日まで散歩は続け、さほど苦しまずに逝った。水郷祭の日は、毎年エリーを思い出しながら、人の流れに逆行して歩いている。

30代フリーター 朝日新聞の世論調査（8月16、17日）で、石破茂は首相を辞めるべきかとの問いに「その必要はない」が54%を占めた。もし党内の「石破おろし」が成功すれば、次の衆院選で自民党は昨秋の衆院選、今夏の参院選以上の惨敗を喫することがほぼ確実だな。

年金生活者 「石破おろし」が石破に追い風となつていく。国民は、自民党が少数与党のまま、野党と交渉して政策を進めることを望んでおり、それができるのは石破くらいしかいないと考えている。彼を辞めさせるわけにはいかないという国民の危機感が調査結果にあらわれた。

30代 安倍政権のような時代には戻したくないという気持ちも石破続投支持を増やした要因のひとつではないか。

年金 インフレになつても利上げできないというアベノミクスの負の遺産が、国民に経済の先行きに不安を覚えさせている。安倍晋三は旧民主党政権時代を「悪夢」と呼び、それに同調す

る世論を推進力に歴代最長政権を築いた。それは当時の国民の大多数が実際に「悪夢」を見ていたという意味ではない。たしかに東日本大震災と福島原発事故で「悪夢」を見た国民はたくさんいた。しかし、それ以外の国民は当時を振り返って、いわば事後的に「悪夢」のイメージを持ったというのが現実だ。

安倍政権はこのイメージとアベノミクスを政権の推進力とした。本来なら景気刺激のカンフル剤として使う財政出動と金融緩和を恒常的な政策にしてしまった。デフレ脱却を目指す「異次元の金融緩和」という言葉でそれを正当化した。その結果、膨大な政府債務が積み上がった。新型コロナとロシアのウクライナ侵略でインフレに転換し、物価の上昇が始まって、それを抑えるための利上げができなくなつた。すれば国債の利回りが上昇して、国家財政は危機を迎えるからだ。

安倍が民主党政権を事後的に「悪夢」化したように、国民はいま安倍時代を事

後的に「悪夢」視し始めている。
30代 もはや自民党そのものを「悪夢」のように感じる国民も多いのではないか。

年金 自民党の国政選挙2連敗は、戦後この党が担ってきた役割を終えたことを物語っている。その役割とはアメリカの覇権のもとでの「平和と繁栄」の維持だ。そのための基本路線が、自民党保守本流の採った「軽武装」「経済優先」だった。

「軽武装」は理念的には憲法9条に、現実的には日米同盟に支えられた。この同盟はアメリカには日本を防衛する義務があるが、日本はアメリカを防衛する義務がない点で、アメリカの持ち出しが多い片務的な条約になっている。

「経済優先」は、アメリカが自国市場の開放とドルの基軸通貨化によつて築いた自由貿易体制に支えられ、高度経済成長を推進する役割を果たした。これもアメリカの持ち出しなしにはあり得なかった。

だが、今のアメリカはそうした持ち出しが可能かつ必要な覇権国家、言い換えれば「世界帝国」の座からずり落ちつつある。ランプがいま進めている高関税や同盟国への軍事費負担の増額要求などは「世界帝国」を「地域帝国」に縮小させるためのリストラにほかならない。

自民党はアメリカの覇権があつてこそ自民党たり得た。派遣国家Ⅱ「世界帝国」としてのアメリカは自民党の存立の世界的な基盤をなしていた。その時代が終わりとつた現在、自民党が戦後政治の主役を降りるのは必然と言える。

「石破おろし」に走る旧安倍派を中心とした議員らにはおそらくその自覚がない。以前のように党の表紙を替える疑似政権交代をすれば、まだ選挙に勝つてると錯覚している。「石破おろし」は世論に押されて挫折するか、成功して次の衆院選で大惨敗するか、どちらかだろう。

30代 「異次元」の高関税政策をとつ

ニュース日記 980
中村 礼治

石破茂が辞めない理由

は、そのぶん目に見える効果を上げやすい。アベノミクスは円安を誘導し、輸出企業を潤わせ、雇用の拡大と株価の上昇をもたらした。ランプノミクスは関税を交渉材料にして日本やEUから米国内への投資の約束を取り付けるなど、国民にアピールしやすい結果を出した。

だが、「度が過ぎる」ことが長く続けば、そのリスクは常態化し、構造化する。アベノミクスは膨大な政府債務を積み上げた結果、物価抑制に必要な利上げができず、国債バブルの崩壊さえ懸念されている。ランプノミクスも高関税がインフレを導き、米国、世界ともGDPが押し下げられるという予測が金融当局やシンクタンクから出されている。

そうなれば、次の大統領選では「ランプノミクスはもうこりこり」という気分が優勢になる可能性がある。「アベノミクスはもうこりこり」という国民の潜在的な気分が石破政権の誕生につながつたように。